

<みん・みん会員だより>NO. 43 (2025. 12. 9)

森は水の源(みなもと) 水は命(いのち)の源 川は命のつながり

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する木曽川・飛騨川・愛知用水の交流を

2025 年の夏は猛烈な暑さが続きました。最高気温は8月5日に群馬県の伊勢崎市で記録した 41.8°C です。6月～8月では、日本の平均気温が平年より 2.36°C 高くなり、2023 年、2024 年の暑い夏を上回り観測史上最高の高温になりました。北海道の北見市で 7 月 24 日に 39.0°C、札幌市で 35.3°C を記録、東海地方では多治見市で 8 月 1 日 39.1°C、2 日 39.6°C、3 日 39.0°C となるなど、全国各地で危険な暑さが続きました。気候危機が進行していることを実感した「夏」でした。

この気候の関係で従来の日時を変更して開催したイベントもありましたが、万全の準備の上で、実施したところもありました。

みん・みんの会事務局では、今年4月の木曽町「蔵開き」、5月の七宗町「赤池弁財天まつり」、6月の「なごや水フェスタ」、7月の木祖村「やぶはら祭り」(写真)、8月の「木曽音楽祭」、9月の「木曽町手仕事市」や今池まつりなどに参加したり、取り組んだりして、上流域の人びとと交流してきました。



みん・みんの会がスタートしたのは 2008 年の 9 月ですので、今年は 18 年目になります。

今回、みん・みんの会の活動の当初から名古屋市会議員として、一緒に木曽川、飛騨川の上流域に出かけて交流・連携を取り組んできた斎藤まことさんに原稿を依頼。斎藤まことさんは、1990 年代に政令都市・初の車いす議員として名古屋市会議員になり、2023 年 4 月まで市会議員として、福祉や平和などで活躍してきました。斎藤まことさんに文書を寄せていただきました。(事務局 かわさき)

「平和こそ最大の福祉」「共に生る街を」～いままでも、これからも～

私は議員を辞めて、今は「わっぽの会」で働いています。福祉のためにがんばっています。次の名古屋市会議員選挙で、新しい議員になってもらえるような人がいないかと考えていますが、なかなか難しいかなと思っています。

35 年前のことでした。私は 1990 年 6 月の名古屋市会議員選挙の千種区補選で当選しました。政令市初の「車いす」議員となりました。それは、私と共に一緒に選挙をやってくれた人びとのお陰でした。それが「まことと共に名古屋をかえる仲間たち」で、そのスローガンは、「平和こそ最大の福祉」「共に生きる街を」でした。



1990 年の 8 月 2 日には湾岸戦争がありました。イラクによるクウェートへの侵攻、そしてアメリカ主導の多国籍軍による戦争でした。日本はアメリカへ資金提供をし、結果的に 130 億ドルを拠出したのです。私は、その時、「湾岸戦争」に反対し、集会やデモに参加して「戦争はダメ」と発言しました。それは、やはり「福祉」と一体のものとして、私たちのスローガンである「平和こそ最大の福祉」「共に生きる街を」だったのです。

私は 90 年代の市会議員選挙で勝ったり負けたりしましたが、1999 年からは市会議員として働いてきました。つまり 30 年前から政治をやってきたのです。また「障害者の自立と政治参加をすすめるネットワーク」などをやってきました。議員として政務調査費の領収書全面公開や障害者の 24 時間介助者保障、市バスや地下鉄のバリアフリー化、学校給

食の中国産食材使用の規制などを取り組んできました。また、「みん・みんの会」でも木曽川上下流域連携の取り組みや「木曽川流域図」の作成もやってきました。

私は 2023 年 4 月から議員ではなくなりましたが、名古屋市の住民としてこれからも「福祉」のために、そして労働・教育・居住などのために、がんばろうと思っています。

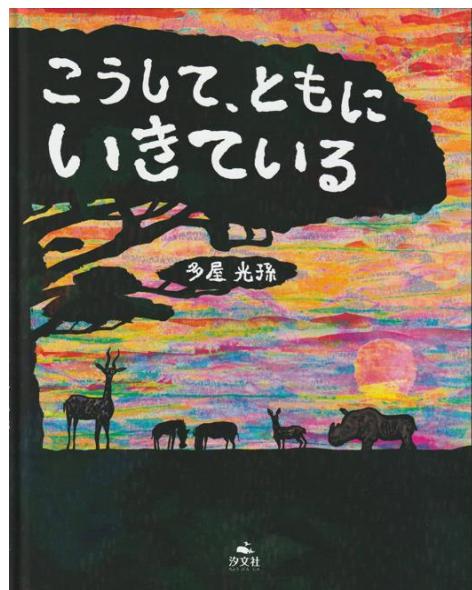
同時に「平和」のこと、つまり戦前・戦後のことなのです。それは中国や朝鮮、アジアへの侵略戦争、広島・長崎の原爆、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして現在のガザ戦争、ウクライナ戦争においても日々生活している多くの住民や子どもたちが犠牲になっています。その意味で、私は「福祉」と「平和」のために、これからも「平和こそ最大の福祉」と思って活動を続けていきます。

斎藤 まこと（前名古屋市議、わっぱの会、みん・みんの会）

* 絵本『こうして、ともにいきている』（多屋 光孫著、汐文社）*

この本では「せかいじゅうに すむ にんげん……。ともに すむ いきものの たべものや すみかを うばっていく。にんげんからも うばっていく」とあります。

著者の多屋光孫（たや みつひろ）さんは「私はこれまで、多様性ある社会の大切さをテーマとする、何冊かの絵本を手がけてきました。『こうして、ともにいきている』は、私が初めて動物の多様性について描いた絵本です。動物が争うことなく、それぞれのやり方で生きている姿を描き、共生をテーマしています。…対して人間。ロシアのウクライナ侵攻や、トランプ政権の多様性を否定する政策などは、この本に登場する動物たちの在り方とは真逆だと感じます。自然の中で静かに共に生きる動物たちと、争いをやめられない人間。話のラストにその対比を通じて、『ともに いきている？』というシンプルな問いかけをすることで締めました。この本が未来を生きる子どもたちの考えるきっかけになればと思います」と述べています。（月刊『こどもの本』2025年7月号）



～木曽の野菜が大人気～9月 14、15 日の今池まつり 木曽広域連合とともに参加

9月 14(日)、15 日(祝)、今池南西商店街の例年通りの場所にブースを出店して木曽の野菜、トウモロコシ、みん・みんの会の「木曽川流域図」や「木曽五木の絵はがき」などの物販を販売しました。



当日、木曽広域連合の方々は早朝から野菜などを積んで会場に合流、木祖村の笹川さんは みん・みんの会の枝豆が温暖化の影響で、実入りが早すぎてしまい、代わりに笹川さんの栽培している野菜を無償で提供してくださいました。

野菜は巷では高値が続いており、木曽の野菜はどんどん売れていき、トウモロコシも「これを買うために今池まつりに来た」と買い求める人も。みん・みんの会の味噌「みなもと」も暑い中にありながら独特の旨味と木曽川上下流交流の活動に关心を寄せ買い求めてくれる人もいました。

『木曽川流域図』は相変わらず、行きかう人の関心を引き付けていました。収益は「木曽川流域水源の里基金」に積み立てられますが、今回はまつり出店料の再度の値上げなど、困難な点も出てきており、

今後の課題となります。(事務局 近藤)

第18回木曽の手仕事市－9月13、14日

～1万6千人がクラフトフェア&おしゃべり&散歩で楽しみました～

9月13、14日の両日、木曽町の3つのエリアに木工、漆、革、布、陶器、硝子、金属などの手仕事「作品」が120近くのブースの中に並べられ、約1万6千人が来場して繰り広げられました。私は14日に出かけて、木曽町文化交流センター・図書館内にある喫茶コーナーで、南木曽町の「木工芸の里」で働いている「桶職人」の河野さんと1時間半余にわたって、いろいろな話を聞かせてもらいました。「九州から木曽の上松技術専門学校に来たのはどうですか」からはじまり、今の「桶職人」の現状やこれからのことについて話してもらいました。私が特に印象に残っているのは、学生時代の画一教育から個性重視で「ゆとり教育」「個性を持ちなさい」と言われて、「こんな孤立している中で、探して見つけることはできない。また、自己責任という考え方にもすごく抵抗があった。こんな社会に認められたくないと思った」「こんな中で、自分の歩みは難しいと考えた」「それから自分が自然や人の“つながり”を実感できる仕事をしたい。『バーチャルな世界が満ち溢れている社会』の中から実感できるモノづくりをやっていきたいと思った」と言われたことです。皆さん、30代の「桶職人」・河野さんを応援してください。お願ひします。



手仕事市では、木曽青峰高校インテリア科と上松技専(写真)などのブースで、作品を見ながらスタッフとおしゃべりして、にぎわっている手仕事市を後にしました。(事務局 かわさき)

第51回木曽音楽祭 「日本の最高峰の室内楽は木曽にあり」

今年も8月28日(木)に前夜祭コンサート、29日(金)から31日(日)にフェスティバルコンサートが行われました。去年50回の節目を迎えて、今年新たに51回目のスタートを切りました。

高度成長期の限界が見え始めた50年前、これらの方には何が必要なのか、どうやって人に来てもらうか、どうやってオンリーワンの町をつく

音楽祭が行われていますが、「持続可能な社会」を目標に始めた木曽音楽祭が日本では最古の音楽祭になったことからもその当時において先見の明があったのだと思います。身分相応という言葉が最適かどうかわかりませんが、木曽の現状を踏まえながら今の室内楽という形になりました。食事ボランティア等町民のサポートあっての上でのことはもちろんです。

松本では、有名なサイトウキネン(後のセイジオザワ松本フェスティバル)が毎年行われていますが、イベント自体が大きくなりすぎて小澤征爾が亡くなった今では持続可能かどうか瀬戸際になりつつあるという声も聞こえてくる中で、木曽音楽祭は当時ではあまり人気がなかった室内楽にこだわったことなどが、今では「日本の最高峰の室内楽は木曽にあり」とまで言われるようになったのだと思います。

去年の50回記念では少し出演者を増やして行われましたが、51回目は以前の出演者数に戻したのにもかかわらず入場者数は去年同様でした。そし



るかと模索している中からこの音楽祭が生まれたと聞いています。今になって各地で様々な規模の

てここ何年かは確実に入場者数を増やしています。世界的にクラシックファンの減少が否めない現状において、木曽音楽祭は木曽に合った大きさの音楽祭を続けてきた事により、持続可能な素晴らしいイベントになってきていると感じています。

「持続可能な地域づくり」という言葉だけが独り歩きして内容が伴わない事例が多いように感じるなか、木曽音楽祭が1つの成功例として町の皆が胸を張ってもいいのではないかと思います。

(小池糀店 唐沢)

「関係人口」活かした「適疎」のまちづくり&「にぎやかな過疎」づくり

全国町村会が発行している『町村週報』にコラム欄があります。「まちづくり」の視点から『『関係人口』活かした『適疎』のまちづくり』(『町村会報』2025年4月14日)と題するコラムを榎田みどり氏(農業ジャーナリスト・明治大学客員教授)が執筆されています。

はじめに北海道の東川町の「写真の町宣言」、「写真文化首都宣言」で文化を軸にした地域の魅力づくりや子ども(子育て)・教育・健康(福祉)の「3つのK」に重点をおいたまちづくりを紹介。そして「…『過疎』でも『過密』でもなく、適当に『疎』が存在する農村だからこそ、人間の顔が見え、挨拶があり、会話があり、人々が共生できる居場所がある。農村政策研究の第一人者である小田切徳美氏の提唱する『にぎやかな過疎』とも通じる言葉だが、同町はすでに2014年には、まちづくりにその視点を盛り込んでいる…」と記載しています。「…さらに、08年のふるさと納税制度の創設時から、同制度を『ひがしかわ株主制度』として関係人口の受け皿に活用。ふるさと納税者をまちづくりに賛同する『株主』と位置づけ、年一回の『株主総会』開催で町に足を運んでもらうきっかけを作り、町を訪れた際の宿泊や飲食店等での優待制度も用意している。…」「条件不利補正のためのインフラ整備はもちろん大事だろうが、それだけでは、利便性の高い場所に人が流出するのを止められない。…」「もっと大事なのは『ここで暮らしたい』と思わせる、都市にはない地域の魅力の掘り起し、磨き、発信すること。それが『関係人口』を呼び込むことにもつながるのではないだろうか。」と結んでいます。

榎田みどり氏の提起していることは、農山村だけでなく、私たちの市町村にも通じる課題・問題です。上流域との交流・連携によって「関係人口」を育んでいくことは、私たちが暮らしている地域でのまちづくりに活かされていくことにつながっています。私は、暮らしている地域での「愛着」と「こだわり」が人とのつながりや自然との関係の基本ではないかと考えています。榎田氏が記述されている「ここで暮らしたい」「地域の魅力の掘り起し、磨き、発信する」は、都市部の私たちにも通じる内容です。上流域と下流域での共通の課題だと捉えています。(事務局 かわさき)

<2026年もご支援・ご協力をお願いします>

【編集後記】2025年は皆様にとって、どのような「年」だったでしょうか。みんなの会事務局にとっては、メンバーの身体の劣化・ダメージが進んだ1年でした。上流域に多いときには年間30回近く出かけて交流や連携の話し合いや作業を行なってきましたが、2025年に私は9回しか出かけることが出来ませんでした。その中で泊まり込みは1回だけです。今回紹介した絵本『こうして、ともに生きている』は“2030年までに地球の陸域と海の30%以上を生物多様性の保全という「30 by 30目標」”として、私の暮らしている地域にある湧水湿地の保全活動を一緒に取り組んでいる人から紹介されました。本の最後のページには「ともにいきている?」と書かれています。

2026年も皆様のご支援、ご協力をお願いします。(事務局 かわさき)

水源の里を守ろう 木曽川流域みんなの会

連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山3-7-11 携帯電話 090-4150-6156 (近藤)
FAX 0574-64-4747 mail: suigennosato@gmail.com